



Fraunhofer Institute の6面型ディスプレイ HyPI-6

◆ Laval Virtual 2001

金時学

東京工業大学

(Newsletter Vol. 6, No. 5 より転載)

TGV でパリから西1時間半のところにあるロワール地方の静かな町 LAVAL で、5月17日から20日の4日間にわたり Laval Virtual 2001 が開かれた。この催しはVR関連の展示会、技術展示、アート展示、技術講習会、学術会議 (Virtual Reality International Conference) そして、学生のためのVRコンテストなどによる複合的なイベントである。丁度日本で開かれている IVR と本学会主催の ICAT を合わせたようなものと考えていただければよいと思う。また、LAVAL という地方の一都市が、大変力をいれてこのイベントを盛り立てている点は、岐阜の VSMM に近いといってよい。事実、この催しには、初回より VSMM の関係者が、様々な面でアドバイスをしている。なお、今年は3度目の開催にあたる。

展示会の内容は、当然欧州企業中心。ディスプレイでは、Barco や TAN が頑張っていた。ファントムに似た構造で作業空間のすこし大きなハプティックデバイスをフランスのベンチャが展示していた。

技術展示やアート展示には、日本から東大、多摩美大、岐阜大、IAMAS、NTT など多くの方々が参加して、この催しを盛り上げた。東工大の佐藤研は、SPIDAR-8 による Rubik Cube と SPIDAR-G を展示した。設置準備中に 200V の電源に誤って直接コンセントを差し込んで、PC と SPIDAR の電源の多くを壊してしまい、一時はどうなることかと心配したが、何とか復旧。展示には間に合わせる事ができた。フランス科学技術省の大臣が直

接視察にきたり、岐阜県の副知事が視察にきたりで、緊張の場面もあったが、とても良い経験になった。

学術会議 (Virtual Reality International Conference) が17日、18日に行われた。会議の参加者は約40名。セッションは次の通り。

Session1. Psychology & VR

Session2. Education, Training & Avatars

Session3. Networks Capabilities & VR Environments

Session4. Art & Architecture

Session5. Interfaces & Industry

Session6. Medicine

Poster Session

全般にハードウェアよりもソフトウェアやシステムに重点をおいた研究発表が目立った。また、欧州らしく幾つかの国にまたがった大学や企業による共同研究が多かった。なお、招待講演者は、Nadia Thalmann (Uni. of Geneva)、D. A. Bowman (Virginia Tech.)、M. Sato (Titech) らである。

来年も同じ時期に LAVAL で第4回が開かれる予定になっている。

◆ 第7回画像センシングシンポジウム

丸田英徳

東京工業大学

画像センシング技術研究会の主催による「第7回 画像センシングシンポジウム (SSII2001)」が2001年6月6日(水)～8日(金)の3日間にわたり横浜市(会場:パシフィコ横浜)で開催された。今回も例年のおり画像センシングの基礎技術から、産業への応用にいたる幅広い分野からの発表が行われた。特に今回の特徴として、ITS や映像生成、顔・行動認識などの人間を対象としたセンシング手法に関する発表が多かった。

初日の6日には、各分野における第一線の講師による以下の4件のチュートリアル講演が行われた。今回は、すべての講演を聞くことができるようなスケジュールが設定され、ほぼ登録定員いっぱいの参加者が以下のテーマの講演を熱心に聴講していた。

・渡邊敏明氏(東芝)

「MPEG-4 国際標準方式と動画像符号化技術の概要」

・ 守田 了氏 (山口大学)

「スケールスペースとその応用」

・ 徐 剛氏 (立命館大学)

「写真による手軽な 3 次元入力と Web3D」

・ 谷口倫一郎氏 (九州大学)

「PC クラスタを用いた多視点実時間画像処理」

いずれの分野もこれからの画像に関する技術の進歩に不可欠なものであり、聴講者の関心の高さがうかがえた。

7 日、8 日にかけては 2 件の特別講演、25 件の口頭発表、49 件のポスター発表がそれぞれのセッションに分けて行われた。

1 件目の特別講演は、京都大学の松山隆司氏による「分散協調視覚：プロジェクトの成果と今後の展望」と題する、今年の 3 月に終了した学術振興会の未来開拓事業プロジェクト分散協調視覚の成果と今後の展望に関するものであった。また、2 件目は、産業技術総合研究所デジタルヒューマン研究ラボの持丸正明氏による「デジタルヒューマン産業の創出に向けて一人間計測と応用」と題する、人体形状モデルに関する研究とその製品開発の事例をふまえた、デジタルヒューマン産業体系創出の展望に関するものであった。

一般口頭発表は以下のセッションに分かれて行われた。

- ・ 画像処理ハードウェアとシステム
- ・ 画像処理アルゴリズム
- ・ VR と映像生成
- ・ ITS
- ・ センサ
- ・ 行動認識

いずれのセッションにおいても、3～5 件の発表があり、それぞれの発表後に活発な質疑応答が行われた。画像センシング技術に対する興味の高さからか、多数の聴講者が関心をもって聞き入っていたように思われる。

また、インタラクティブセッション (ポスターセッション) においては、その研究成果を実際に評価してもらうために、PC 等の機器等を持ち込んで実演をしながらの議論が多数見られた。特に、顔・表情認識等の技術に関する研究や、人を含む運動物体の認識・解析等の研究が比較的多かったせいか、とても印象に残った。

今回も前回と同様 700 名近い参加者があったそうで、画像技術に関する関心が日増しに高まっている現れだと思われる。

特に筆者は、インタラクティブセッションでプレゼンテーションを行ったが、どのブースにおいても聴講者が途切れることなくおとずれ、セッションの開始時間から終了時間をオーバーするほど、活発な議論が交わされていた。

最後になりましたが、本シンポジウムの主催者ならびに組織・実行・プログラムの各委員の方々に敬意を表します。

◆ Graphics Interfaces & Vision Interface

伊藤雄一

大阪大学

町田貴史

奈良先端科学技術大学院大学

(Newsletter Vol. 6, No. 6 より転載)

建物が荘厳で美しく、歴史を感じさせる緑あふれる街、カナダの首都オタワにて、6 月 7 日から 9 日まで、3 つの国際会議 GI (Graphics Interfaces) と VI (Vision-Interface)、AI (Artificial Intelligence) が開催された。これらはカナダにおいては非常にメジャーな学会であるが、発表者や一般の参加者はカナダのみならず、全世界各地から数多く集まっていた。もちろん、会場では日本人の姿も見受けられた。これら 3 つの会議うち、いずれか 1 つに申し込めば、他の会議も自由に聴くことができるというシステムで、参加者が興味のあるセッションに参加するために、会場を行ったり来たりするという光景があちこちで見受けられた。3 つの会議を合わせた参加者は 200 名ほどで、会場の Marriot ホテルはかなりの熱気に包まれていた。

本レポートでは、まず、伊藤が GI に Student Volunteer として参加した報告をする。そして、町田が発表者として VI に参加した報告をする。

■ GI: Student Volunteer としての参加

Graphics Interface 2001 は、Canadian Human-Computer Communications Society の主催で、今回が 27 回目の開催となる。(有名な SIGGRAPH が 2000 年に 27 回目の開催であったことを考えると、それに匹敵する歴